

208
3
692



復讐十三七月下之巻

蓬洲著



第四場

其頃六浦の邊に又怪しき賊の出来とせり魁首
ハ白髪のお母に『数十人の曲者をこころひ是
等をバウちここに穴居せしめ其身ハ苦ひさ
志の荒るる家にひとり住る夜なく遠近の往

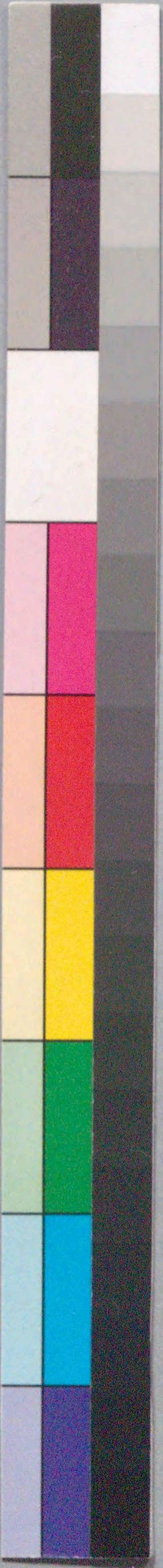


還に出で旅人を害し恣に資財を奪ふまうりといへども横山う徒のごとく「白昼に横行せず涙忍びて事を謀きば」皆面に狐の面をうぶりて「唯妖狐の所為とのゝいひまさしむ」こハいうる者にや「夫ハ物置鳥が啼吾妻の花の鎌倉山時代もさら玉昌んある」官街の大都會雪の下といへるハ民家の梁厦連綿として工商各富饒あらずといふ事あり爰に駅舎の喜四郎といふもの元来剛

家にして「君」の妓女を育み「旅人の」弄給ひ備へしきハ「遊子」ハ馬を飛ばせし此門に來り行客ハ足を停めしをのりて歸るを忘るさきバ内には酒肴口に飽糸竹耳に誼しきまで「其繁榮謂んく」こあし仕へる男女あまごある中に「今春の吉弥」ハ凡人に勝きて容儀よくなを利発に見ゆきバ手代の役をも勤むべきに定まりし抱へ置る餘りの妓女共皆已き先にと心を寄せ其上吉弥

二

〇

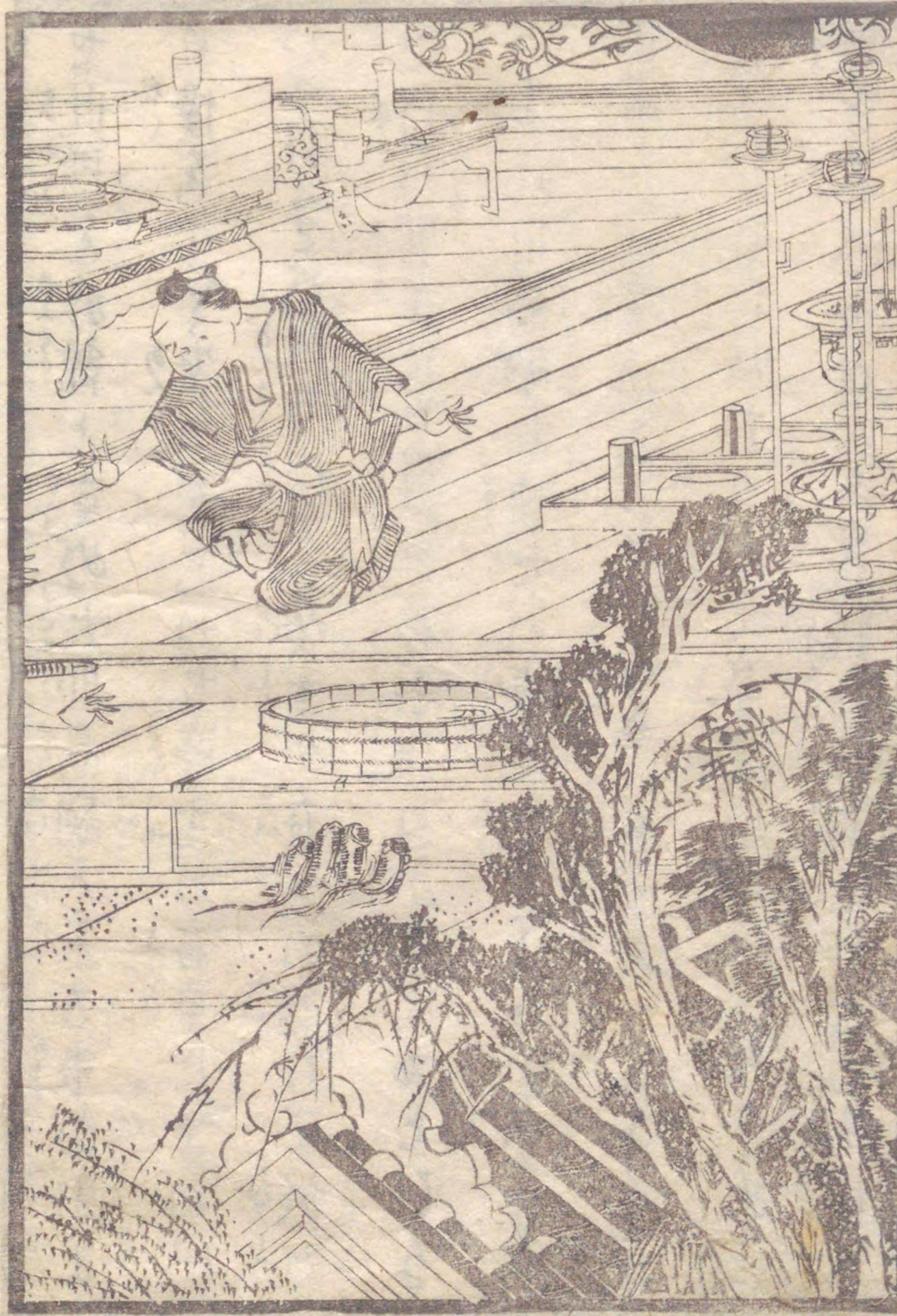
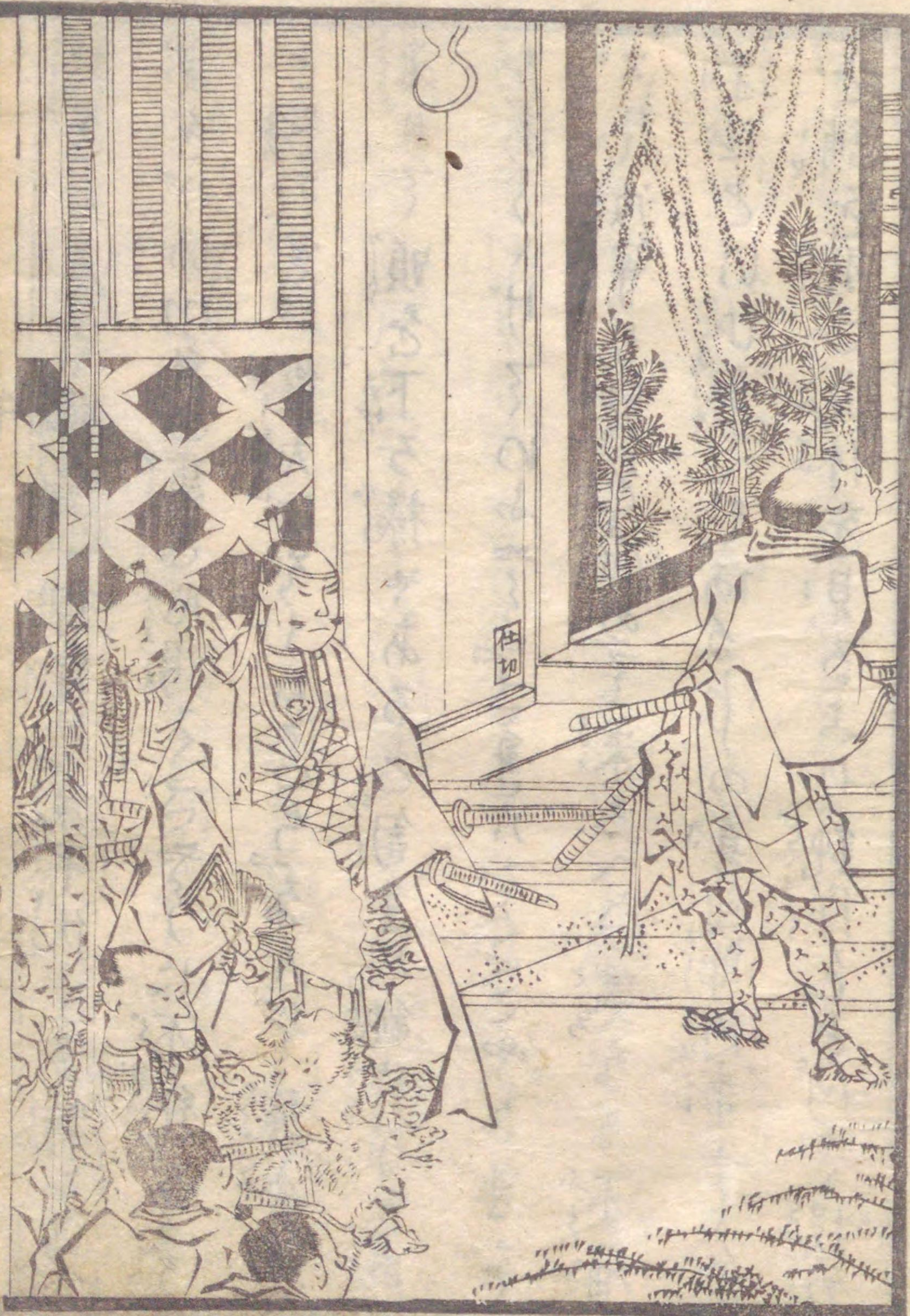


グめてこそ顔に競ふきバ他ハ皆墨のごとくに見
ゆきバ何るどしせんくこるくこらと小者に落
て買物役をいひつけしむひとこそ是を見る人ハ
何のき女とぞあふばいうる玉簪にも乗りあんも
の成いとおし事よ杯いひあへるもおく又同
志小者の鈍作といへる前髪ハ其性骨鈍ある故
に名つけし毎事に忘きやましく言事為まこと
間にあハぬぐちあきバ喜四郎見くもて或時汲切

に言附けるハ若或ハ外より人来りて亭主ハ在
宅りと問ハ宿あふバ尤様といひ留主あふバ他
出いごせーといふべしつぎに七在宅ハ宿に居る
ことと心得他出ハるまのことと心得へし不断こそ
らの間違あきバ以後を教ゆるあり又くる賣買
にそハ人をせうふさめ方を第一とし次に客へ茶を
まいらまると時ハ静に下に居るさし何ぐぬし杯
こまやうにいひ含めて仕へるハ実役介ある小丁

児あり時に喜四郎うもて横山の一族と馴睦ま
くありけるが此此六浦の邊に狐の妖怪ありて夥
しく往還の旅人を剥食うより上間に達しけき
荒川武虎悪狐退治の嵐命を蒙り近々彼の所
に発行あるにふりて先在るより犬の遅しきを
獲り集る旨聞えり武虎より横山が於へて此所
にありなきは太郎高嗣次郎高春が秘藏せし二
匹の白犬を奉りてんとて従者にくるんの犬を引

せ此所を旅館と定め太郎高嗣入来る表の方よ
り僕をいそぎ案内を乞はせ亭主ハ在宅にやとい
ひしむきば鈍作出で亭主の在宅の宿に候は
他行ハ留主に候と答へ僕ハ不審におもひな
ぐは此由高嗣に申せば高嗣叱りてなとさやう
の事をバ申すまうとけあはきよと下知すまは
僕まは鈍作にむらむら亭主ハ居るり居らぬら
眠と答へよといふを鈍作ハ物をせ云ハぞ僕が



頭をとりへく 倅端に押付け 汝平伏して物をいへ
髪をバいのきの處と心得くさやうに不礼あるが
と咎むきバ 僕大にちうをこちるんぞ 旅舎不
来りて頭を下る様やあると 罰まバ 鉦作をを声
をあぐ、げまのいふやう ちうまハまごいあまきを
まき 汝等も腰を屈めて来るべさ處あり 不届
至極といひ争へど 何の喜四郎何事やとん
と舖を覗き 此体を見るより 鉦作をとりて 投の

中
五

け 汝氣の違ひしるにやと 叱りゆくまハ 鉦作ハ
涙を流し 此鉦作ハ氣も違ひよとか、る賣買にて
ハ人を反らさぬを第一と思へど 社々やうに頭
を押付け七屈ませんとするものを 叱りあふハ
情をやと声をぞありに 泣居るときバ 喜四郎七セ
んりさるく 大に目下ひて表を見きバ 太郎高嗣
大小野袴立 汝をゆく 家来召供し 肅然として
立ときバ 喜四郎大に驚ろき 平伏して 其俵上



に請に頼而饗應の支度にくりて勝手ハ急ぐ
其中に鈍作ハ茶を運んと被足して遼々梯の七
とに来とり物をも云ハぢ手とさ上茶室を
持ち立蹲踞り居りて喜四郎見解て此
開敷に何の真似をうすといハ鈍作答へて茶
を客に参らせむバ静に下に居て差上ぐべしと
聞とるゆへうやうに二階までハ登らずと
いふにぞ喜四郎いよこへくまどぐる貴人

に番茶を上ぐべきハ茶もへんに仕立べきと
汝グことさ阿房に用ち却而立ありくハ邪摩
るまバ部屋に入りて出づへくばと下のうへ
追やりの續いて入来る横山三郎高景先に来と
きる兄弟と同席にマ何の喜四郎にいひけ
るハ我爰に来ることハ父大膳より羊々武虎の
奥ぐこへ差上る當所の名産白梅香とり薬油
例にまうせマ汝へ申付る間とのへ差出す

べし仍之いまだ父ちちが秋あき藏くらの珍うつく器もの王きみの壺つぼを其その方かたへ渡わたし
置おけバぞん万ばん事じ心しんをりけり仕し損そんドんあさやうう小こりこ
やよと彼かの玉たま壺つぼをとり出いし喜き四し郎らうにこころき
バつつしんで是こゝを叔おやの兎う角かくしん日ひも未みのさ下さり
るきババ兄あに弟いハ打う窈やう之の酒しゆ宴えんを設たまま妓き女によをあ
つめ思おもひのままにぎ樂らしんる物もの又また奥おくのい間まに
ハ重えり大臣だいじんとま優あにやさしき若わか者ものあるが多おほくの
幸さい頭まう未み社しゃを引ひ連つきい幾いく日にちとなくと留とどりて爰こゝにも

あまあまま少せう婦ふをまままを唄ひつ舞まつ戯るハのり
さぬ當とう国こく遊ゆう覧らんのり旅り人にんとも見みえこるが是こゝ暗くら姫ひめが
云い号ごうをお小こ牧まき要よう之の助すけ重えり光こうのま主しゆ従じゆとハ後のちにぎお
もひ當ありことし然しかるに重えり大だい臣しんあるとき吉弥やが顔
よさを見初はつめしらうの者もの客きやくハ男をまままども正ただしく
女にある事をさとまいつる子細こうあんをままバ
問とよりき聞きうまほしく思ふといへども他の人
目めを憚りまむあしく数すう日にちを送るところに吉弥や

下

〇





もまゝに重大臣の艶あるいろりに迷ひ朝夕にあぐ
がきつゝ「巴が浅まき姿を悔まハ心にもあぐぬ
作業をうあゝ」譬へ何程戀ふるとも斯く教を
らぬ賤の男と見ぬるバ」はうぐう言葉をもつけ
みらん」さるに〜もよびあぐら君が俣をうりを
も見奉つり」あぐらあもひをうぐさんと忍
びま二階を窺ふ折しもあるの喜四郎が声と
まゝ吉弥くと呼こ〜まバ」と驚ろる〜といと

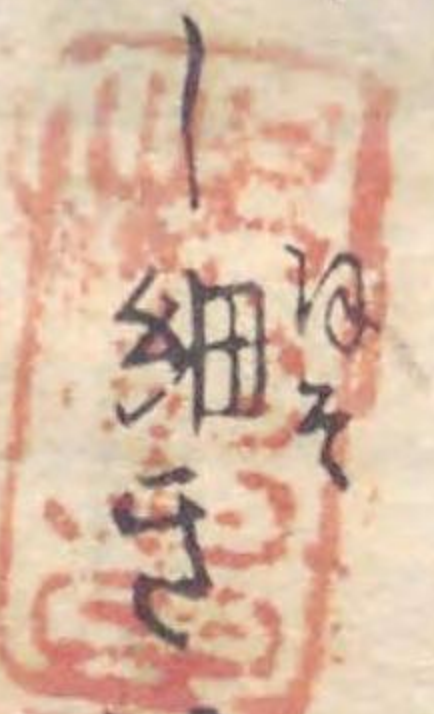
あるの前にぎいこりくる喜四郎吉弥にいひ
くるハ我先刻當山の油屋へ申付置くる白梅香
の薬油一斤宜早壺中に詰置〜あ〜」汝行マ持
来るぞ」宜大切の玉壺もきハ念入ま〜持参セ
よと〜び〜もいひ〜吉弥ハ〜と承り
油屋さ〜出行を喜四郎ハ呼も〜我大に
忘〜事あり先に鈍作を叱るに乳中〜未
彼の御客へ茶を上ゆバ此序によ〜煎茶をもと

下

十



のへ来きといひやりぬ提眼本のあぢりうひり
下油屋のえんに氷つらぐさのつらすぐさころんぐ油
外にぼしととりよにいとらそらハ吉跡あやまらぐ玉壺
を砕く其の戦ハ爰に油屋の義兵衛とて有徳に見
ゆる商人あり彼の名法と名に高さ白梅香の油
を製し紅を絞まるるこ手にハ茶をあきあひく
世を渡る其昔日をこつめきバ由ある人のそそ
ありしが日を追々零落し細きけありも立ちぬ
るに其頃妻ハ一人の女子を産く育て上ぐべさ



手ぐもなるきぐさるべき方の乳入たと出
くこの滝川道正が館と聞し主人家没落乃
砌より松乗が谷の災難に多くの山賊を切り殺
るるいづち行かん絶く音信ぐんあけきバ其日
を死しはる時と定め爰に去年の冬拾三年の
仙事さへ當るきバや生きた子七小笹と
て巳に二八の盛りとハ成りぬ眉目よく揃ふ
花ろくきバいこつて人の手折らんもおぼつ



あしとあぐ爺親の手ひとりに油ある目も休ま
きず紅のいろく心を配きバ人も香具の箱入と
や見るづきとさきど油の名に白梅のひとくる
も入知まば春の心の動に因り皐月の梅の色づ
くも吾と落ぬづき時いときバなどちハ枝に止る
づき誘ふ水あぶがと思ふ此年月小笹ハそくば
旅舎の吉弥を見始しよりさばしもおもひのや
すむづき時あくいつら會せんよもづなと心を

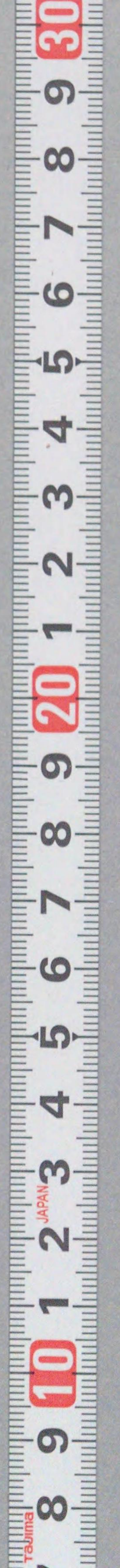
くづき其折しも吉弥ハ髪にさとりと油の入り
志玉壺を受取くこ手にハ茶の袋をさげとさ目
もあぶぎ立りへる比も歳暮のりぞく日に市のうち
外のいきのしよまぞき日の暮くるを幸ん小笹
ハ見世を起り出吉弥がこもとに取すがりまの
ふやうハとさも戀死らん此身なきバ斯く恥し
さもへりまざ心のこけとがまらうせんまざりハ
哀れと思しやりま唯ひと言の返事せよとこ

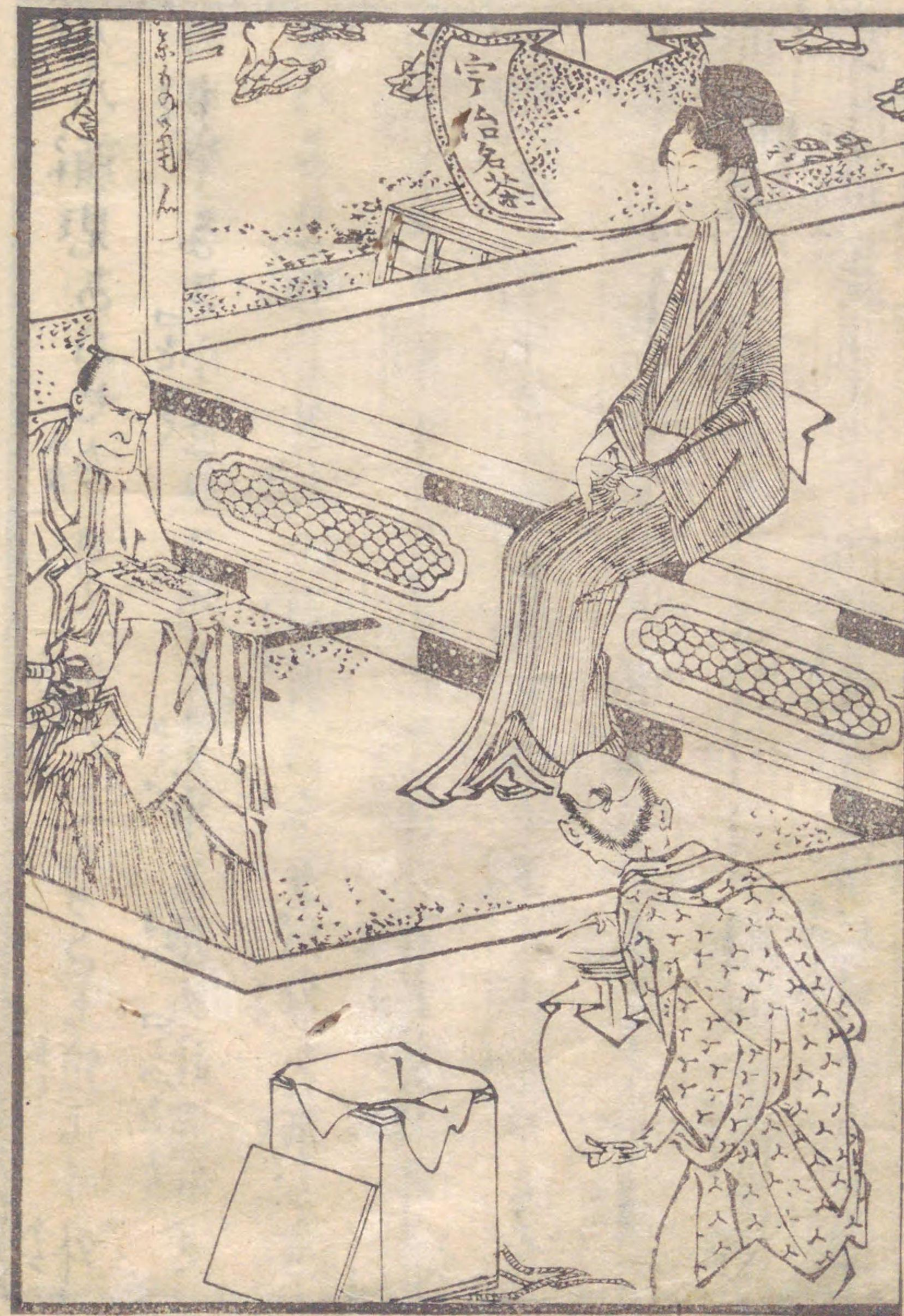
口説にくどさうきバ吉弥ハ聞くより十方に暮
御心ざしハ有がさう候へども口ふり子細あり
戀の道ハ禁物に候へバもの、哀きもおもひや
りさへばらゆへ近づくあふると心づよくも
ふりさあし「逃んとすを引とめく」とむる「留るぬ
袖ともと小蝶の狂ふ風情にくるまごころさへ追
めぐる此をぐまに持とる玉壺を取落せば箱も微
塵に碎け川に玉壺ハ四方へ飛散こりまづとこ

下
〇十一

人ハ顔見あハセ今さう何とせんうこそ泣より外
の事ぢまるさ小笹ハさうと覚悟を極め此過せ日
ふハより「戀しき人の難義とまるさバ咄を我グ身
に引つけく罪せうきんと欠出す残吉弥ハ志はじ
と引とめ理リハさる事をぐり使の役目ハ月ら
ハなすバ譬へ御身の名乗出あふ共日さハも共ハ
不念の段其咄めあくるハ叶ハざ殊に女子を伴
まハ不義いさづ故役目をも疎略にせしと疑

下
〇十三

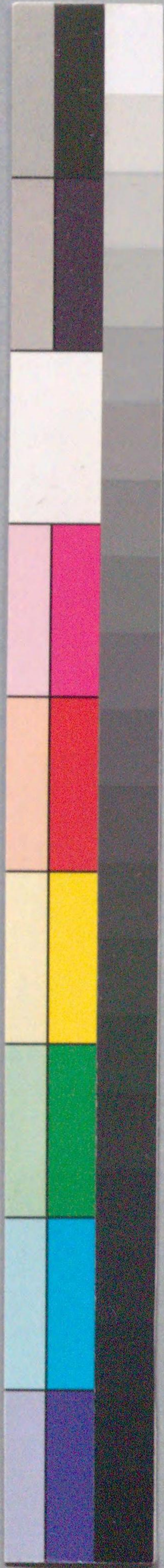




ハきこいよく罪ハ重る道理爰の所を聞けり
歸りあやうくハズ為さやくいませぬやと引
こてらきこせんうこちやく跡へも先づも引ぬ
る其身をうこ小投臥し前後もちら泣居こ
至此ひぬに吉弥ハ急い喜四郎が七とにうへり
見世の暖簾のうこ隅に茫然とすそいそげ斯
くと主人へ知らせまバもとより短氣の喜四郎
あきバちど此休に許すべき珠に打碎き一玉壺

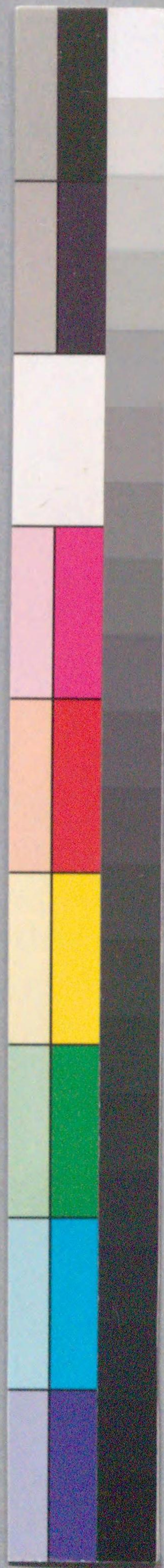
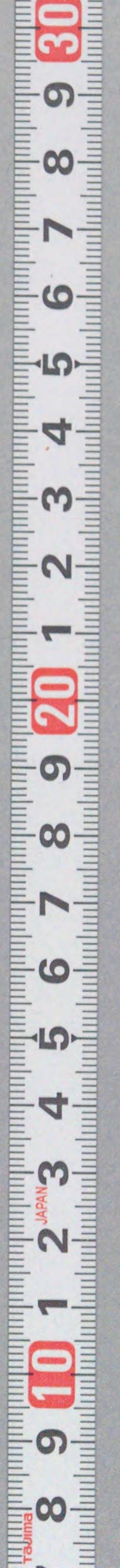
ハ横山大膳が調宝と聞くあきバ二郎高景への
云訳にも必定命を失なハきんハまのあこりち
るぬさすきバ敵の爲に此身を果しけり
せん父母のうらみ報せんことをひとまが爰
を立遣んにハちらうとて甲斐くく小裙を
ういくり表のうらみ出んとす首筋を志りとと
らくいつくへ行と喜四郎が引もどして下居
吉弥がうらみあやう様子悟り御用の油ハいら

下
二五



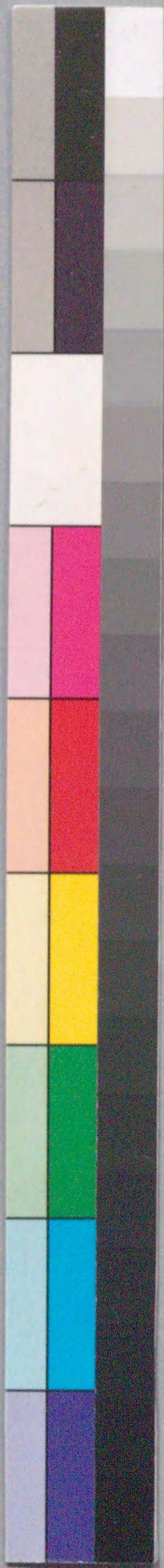
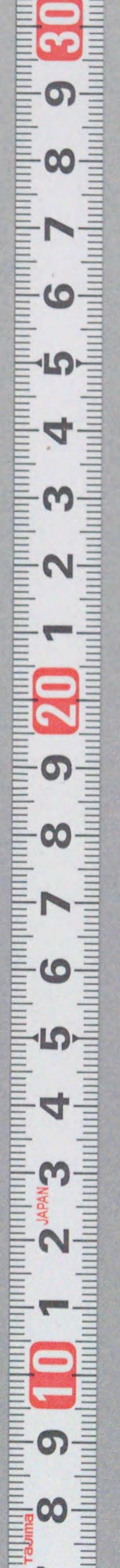
せしと訶きバ吉弥ハいとゞあるにもありきぞ何
と答へし言葉もあく誤り入る我見えにんる玉
壺ハいづゞいこせしとと堰にせしと尋ぬまバを
つとぢらりたひき卧しと正体ちんちん怒をま
有無の返答いハぬとく言さで事のすむべさりと
にぞりこづりをふりあげゆくと下々と并居へ大
り吉弥ハくるしき息の下より事を設けくこ
く日油屋とく玉壺を受取椽を下り来る足も

とに溜まる水の氷り居ら暗まぞきあへ夫と
も知らぞ踏りけしにをさぐと倒轉びまらる
過をバ仕出しをりぬさきバ此身にいつた
罪を肩せあはるとも飽しを思召さむら半が
慈悲に情に命をうりハ助けめめくと肝の仰ぎ
り泣とふきバ喜四郎聞より仰天し汝志らぞ也
彼の玉壺ハ天下無雙の名器といひ殊に一度我
あがり奉る所あるをハ碎けしと其分に云ひ



出がごとく又汝がづとさ見うけに似合ぬ廉忍七
のたひひつけハ此喜四郎があやまりあきハ
旁申披さの爲汝が首を打後我腹切より外ハあ
さりあぐ一先高景公へ申上御意に任せ取
ちららんと音弥をバ柱にくり其身ハ直に
横山が酒宴の坐鋪にいりたる物高景公始終
を語きハ三郎ハ打驚さぐあせんとても小
下見が廉相より爲過あきバ汝切腹の謂き

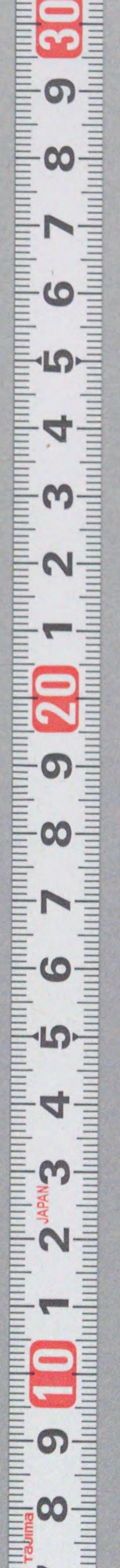
あさりあぐ一先大膳へ申披のこめ其小下見
が首打持ゆくべくとく是へ連き来きと
下知すれバこハ有ぐと喜四郎ハおの身ぬ
けを歎ひつ梯を下る間もあせせば頓而音弥
を引立きバ屠所ひつどの羊の志ほくとらあこへをハ
出来りぬ三郎ハ刀の鏝元くつろげ今や討ん
づしほひなるを同席にあびこる太郎高嗣
ちとと止め今高景のいハる通金く彼某が



麿相よりせし過ちありをもとめし是を碎くに
あはれ然るに一命に及ばん事いづる事をも
能く己まへめむべし野あり楚語にも以て
室とする事あり唯善以て室とすといへきば金
玉の何ぞ室とすも小足ん善人をこぼす室をハ
いふありさきば玉壺の碎けしるハ惜むべし
ず不仁の名に聞えんハ惜むべし父に七つくと
諫めをハさの怒りもあはれとおもへど是

ハ御身の命せし事ありハ御身ゆきて父
に謂らんによし謀り候へ幸い此程二足の犬
を引来きハ喜四郎が方の僕ども油もくる途
中に不慮にあつたこの飼犬の狂ひくり玉壺
を落し且油をハ尽く嘗こりき仍之僕等ハ云訊
の立ぐさやおもひん各其場あり逐轉して行
衛をきくと聞へしより御身怒りて喜四郎をい
ましめ次に二足の犬を殺しあはれたいいな

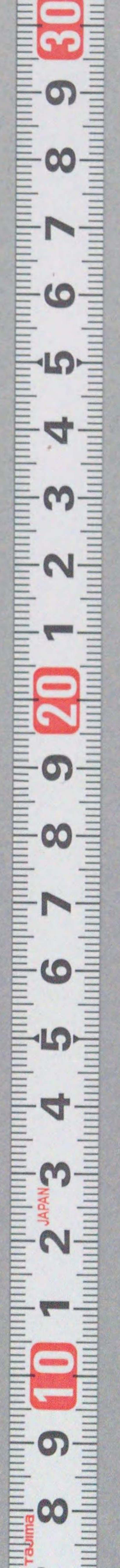
二
の十八



さバ難^あく事^{こと}すむべ^べト夫^{つま}も犬^{いぬ}を引^ひ来^きら^らすバ
ま^まと^とや^やら^らに^にも^も聞^きえ^えま^まぐ^ぐん^んき^きど^ど正^{ただ}しく^く飼^か犬^{いぬ}を
殺^{ころ}さ^さバ父^{ちち}七^{なな}備^びと^と思^{おも}ひ^ひぬ^ぬぐ^ぐさ^さり^りな^なぐ^ぐか^かく
父^{ちち}を^を欺^{あざむ}く^く罪^{つみ}大^{おほい}あり^りと^とい^いへ^へど^ども^も彼^{かれ}の^の羊^{ひつね}を^をも^もゆ^ゆ
半^{はん}に^にく^くべ^べる^る例^{れい}に^にあ^あら^らひ^ひく^く爰^{こゝ}に^に仁^{にん}惠^{えい}を^を施^ほこ^こ
入^い命^{めい}を^を助^{たす}く^くべ^べき^き手^てご^ごま^まな^なき^きバ^バ止^や事^じを^を得^えぬ^ぬ所^{ところ}な
り^りへ^へま^まぐ^ぐも^も克^{よく}く^く奔^{ほん}へ^へく^く討^{うち}く^くハ^ハき^きよ^よと^と細^{こま}う^うに
異^い見^{けん}に^に及^{およ}ぶ^ぶと^とい^いへ^へど^ども^も高^{たか}景^{けい}ハ^ハ頭^{かぶ}を^をふ^ふり^り何^{なに}ぞ^ぞ喜^{よろこ}

四^し郎^{ろう}が^が下^{しも}部^べこ^こと^とま^まの^の命^{いのち}を^をと^とる^ると^とま^まハ^ハむ^むげ^げう
あ^あら^ら事^{こと}の^のあ^あら^らむ^むぎ^ぎ必^{かならず}と^とま^まめ^めあ^あら^らむ^むと^と長^{なが}而^{して}刀^{やいば}を^を
ぬ^ぬき^きま^まあ^あら^らむ^む吉^{きち}弥^やが^がう^うろ^ろに^に廻^まる^ると^と見^みへ^へら
忽^{たち}襟^{まわし}も^もと^との^の白^{しろ}さに^に目^めと^とあ^あり^りこ^こハ^ハけ^けく^くと^とぬ^ぬあ^あそ
や^やう^うさ^さし^し思^{おも}ハ^ハむ^むも^も吉^{きち}弥^やが^が顔^{かほ}を^をさ^さし^し覗^{のぞ}け^けバ^バ雨^{あめ}を^を
帯^{おび}こ^こる^る英^{えい}英^{えい}の^のこ^こと^とく^く婀^あ娜^なこ^こる^る容^{よう}色^{しき}世^よに^にあ^あら^らむ^む
あ^あら^らざ^ざり^りけ^けき^きバ^バ衆^{しゆ}道^{どう}の^の望^{のぞ}み^みや^や発^はり^りけ^けん^ん手^ても^もち
不^ふさ^さこ^こに^に刀^{やいば}を^を収^こめ^めま^まぞ^ぞし^し見^みと^とま^ま居^いこ^こり^りける

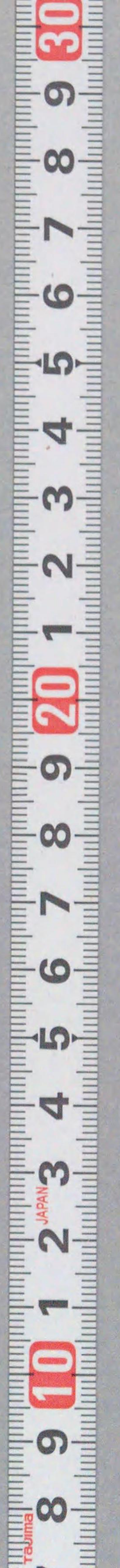
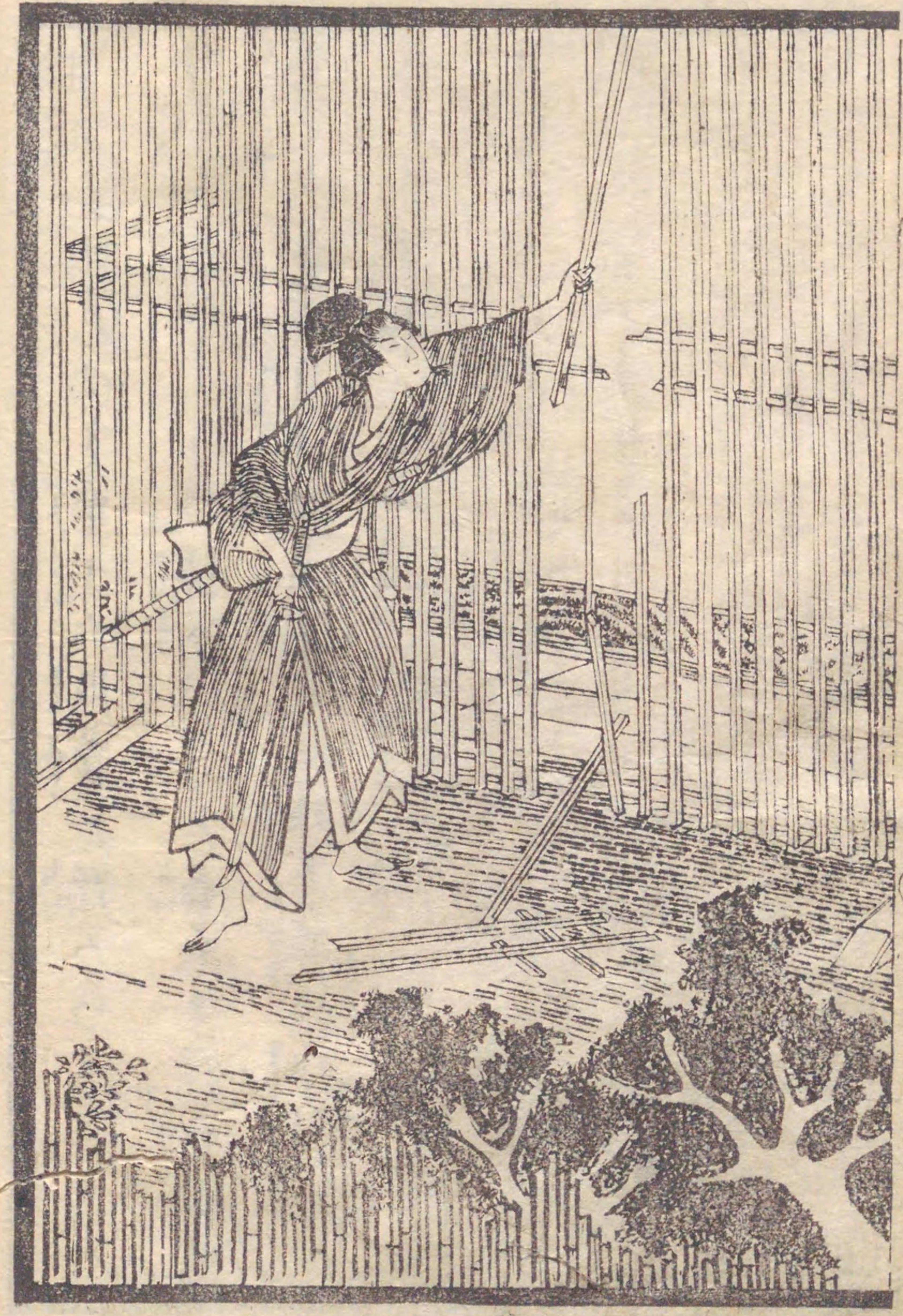
し
し



第五場

其夜高景竊に喜四郎を一問へまゝのき汝の
て我がへ注進に及びころ川先年鎌倉より征討
ありし小牧重光が主従此比爰に忍びて逗留し
武虎なうこんと謀るよし今な伐然るや今度
我油をどくのへん為と号し此所このところに自身越こる其
實ハのそりふりきりて生捕速小鎌倉へ引ひきし

唯汝と兩人の莫大の恩賞に預うらんとささ
き心を用ひりなり様子いづと尋ぬきバ喜四郎
答くさきバ日外より多くの妓女共に申付手を
尽して留置とめおきバ皆々酒色に耽りまひづらん
も動く々々さハ見え申さば是究竟の處をきバ
密に良計を廻めぐりさき一人ものことまづめとり
く鎌倉へ引ひりせめくと悪を助くる一言ハ高景ハ
うちらめけさ然あるが汝今宵のうち珍めづらしき



看をちりひ彼が坐鋪へ持行て思ひの依に酒
を進めよ十分に酔ハ一めをば我踏込んて一
に搦め捕らん必ぬぐるを畏さあふると亭主ハ
下へ高景ハこゝに別る、其折しも何こりに
立聞く以前の吉弥心のうち大におどろき物ハ
重大臣と聞えしハ我がひひをけの夫はくあ
りよ余呼に聞くさへ恐ろしきエマハ志らも
我夫を搦めんこのめの酒もりなきバをまこと一言

告参らせ今宵の酒にハ酔せどものをと心ハやけに
さやまどせいひよる事もあらざきバとやせんやと
立つ居つ坐敷のやうまを窺ふ所にや喜四郎ハ看を
あつと手づつり持て入来きバ見つけりきどとうこへる
一間のうちにけり物高景ハ拾手早縄用意して是を
同く忍寄坐敷を目らけく窺ひ居る吉弥ハ其まこと
心付我が夫の急難をすくはん手立ハ茲にありとると
高景が後にまじを袂を引く云けるはささこに目ハを



助ぬる時ひきやうに聞えさせぬことくらる下部の
賤さ身に露の情をうけぬん御心のうごけなよ
今おきハちごごひまひとせん問見ぐるしげれどヨハガ
部屋まで来りぬと手をとまハ高景こちまち心を
奪ハ礼さるバ何方までも行ぬらまハ案内せよと云
つても吉弥にちると懐付しを吉弥ハ手をもやく高景が
腰にさしこる短刀を奪ひ取りうう御冬候へとま
このびくくに二階を下り廊を隔て行程小勝手の方も

うちすぎま暗さ下屋小いりなる高景を扱こに
待せ吉弥ハ彼の鈍作が部屋に入熟睡する鈍作を
お里をこく何事をうこのまん耳うちそ居たり
しぐ吉弥ハ其体身を隠して後園のうこへ逃去りぬ
高景ハ夫ともちとす鈍作に伴るハまきく此部屋の
内にいこまバ燈もあく顔さへも見えろるぬと其
人をふめと心うまきくちあぢり假寐の肱枕衣うごき
まどろまぬ爰に重光主従ハ亭主の馳走に酩酊して

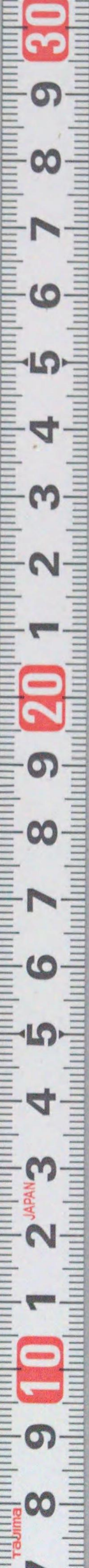
廿二
廿二



前後もさうずけしなるにぞさきまのしつりと喜四郎ハ
高景が来るをまゝとせ更さらに音ねにせざりんまきぞ
いらハせんと氣きをあやりまうまここをさづく
ゆく吉弥ハ此この處ところを伺うひく重光むねみつがみける居ゐる後乃
聯子れんしにうけのほま彼かのの奪ひこる短刀たんとうをぬさをちて外と
がより切やめきバすハ盗ぬす人ひとよと重光むねみつがむつくと起て白眼はくがん
やるこゝハ笑わら顔が見みえる同お思もひの夫ととハ云いひめ目め元もとに
知しきこいハ兎う角かく一いち内うちに入り晴姫はるひめハ始終しじうを明し今宵よ彼

等らがエ一いち事ことまま逐お二に物もの語ごりマ巴まに妹婿むこの契をせこめこし
重光むねみつのいへらくくてあるべき所をいひバ我われ一いち先まを落て
うに御ご身みのちるべある初瀬せ寺てらに赴べ一跡あとハ郎等らに心
を付て追々おちち入り落おさすべしさバ聯子れんしの境より落させ
あへと晴姫はるひめが名残なごりを一げに見み送おくり俣をえず成行なりバ心せハく
郎等らをおり起し斯と告ぎど正ただ体たいをく又また怪あやし目す其所ところへ
高景たかかげ漸お々お喜こ四し郎らう諸しよ共ども馳ち来きり重光むねみつを捕とんとあこりを見れ
と七影かげをあく吉弥きちやが獨立ひとりこりを高景たかかげハ夫と見る物ハ今迄いま添

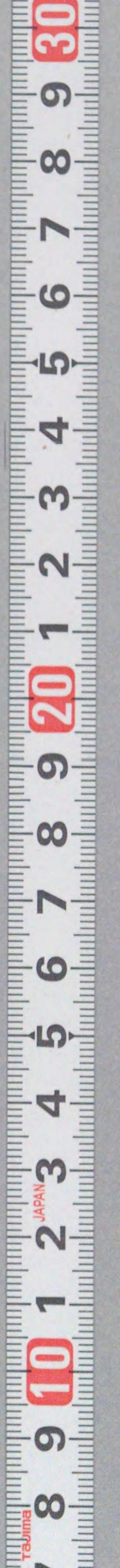




臥せし若衆ハ汝と思ひの外爰に在り重光を落せしと覺へる悪
 小丁兒今ヲ拔入思知きと天刀拔くごとく飛くまば正体ハ
 郎守共各刀拔持く高景を真中に取田こまに控し喜四郎
 ハに吉弥を捨臥まバ待こと留マ吃にぐごと立る手裡劍の
 主ハこの障子を押明太郎高嗣愆然と立出道正の息女
 晴姫への寸志ぞり爰搦ハせと適さめくと聞く驚く晴
 姫が長居ハ恐き此俵に御暇申と聯子よの家根を
 つひく掬を下り起つ轉びつ重光が跡を志こぞ下之巻終

復讐言十三七月後編

重光が軍法ハ六浦の一ツ家
 晴姫が仇討ハ足柄山の妖怪
 是則本文の其犬哉どうしと大鼓ハをりてどく
 りちつく下畧といへるまごの註記ハ節婦小萬
 が来由ハ明也 来已之春発行



復讎言十三七月

蓬洲作

中本三冊

此書者お目さぬいくつ十三七まご斬ハ若ひち中畧
大鼓にそづくどんくうちくと下畧と云る童歌の
曲来と説る新作あり

復讎言雙又三弦

蓬洲画作

中本三冊

此釋史き日本に三弦を弾始めころ石村檢拔之
事跡を朋と具復讎の奇説をもて是が植とす將
辛若に節つくり歡樂に手を付て導善除惡の音声有高調

嬖人むすめいんに

教草情奥義

蓬洲画作

中本二冊

竹取物語に擬して一竹多竹多右工門此
軒跡を明しくや姫のむうにさふてし比女の
傳を演が廣く人情にこりて克く仁の道を諭也

繡像鐫銅物語

蓬洲画作

大本五冊

北むら日り詰ま糸め仙せん人じん

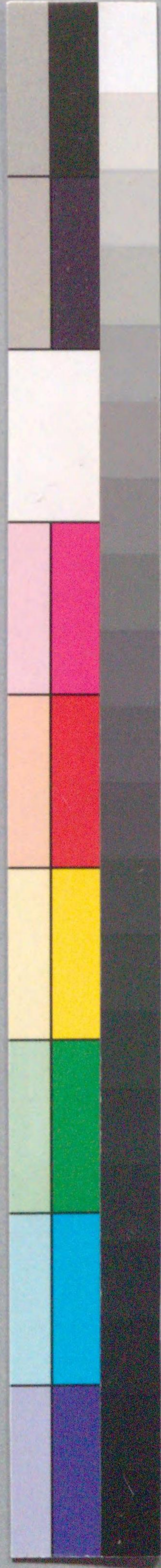
同上

同

大傳馬甲三丁目 榎本吉兵衛
湯嶋天神表門通 越後屋庄兵衛
本郷三丁目 越前屋長右衛門
同 四丁目 武藏屋喜右衛門
文化五戊辰年春正月

208
3
692





国立国会図書館 復讎十三七月 3巻 208-692



ガラス使用

